

第1章（2013年 輪の年）

「輪」を喜び、「輪」の大切さを感じた年

公益財団法人 日本漢字能力検定協会が毎年
年末に今年一年の世相を表す漢字一字とその
理由を全国から募集し、最も応募数の多かつ
た漢字を、京都・清水寺の森清範貫主の揮毫
により発表している。

2013.2.7 ロシアからイリナ、マークさん来日

平成15（2003）年8月、ロシアのサンクトペテルブルク旅行で
お世話になったイリナさんと、ご主人のマークさんが来日。東
京での世界光学会の学会出席を終え、土肥壽秀君の案内で関西
へ立ち寄ったのを機会に、東条湖グリーンプラザホテルに滞在
され夕食をともにした。

社高校時代からの友人の土肥壽秀君曰く、「英語は今や完全唯
一の国際言語。しかし、ネイティブスピーカーでない限り、そ
れを完全に使いこなすことは無理、私たちはインターナシヨナル・
イングリッシュができればそれでよい。お互いに相手を思
いやって聞き、発音して分かり合えばよい」。土肥夫妻の英語に
は敵わないが、英語で楽しい夕食をともにした（イリナ、マー
クはともに夫婦の秘話以外は英語）。

世の中、Something Difference、『一味違います』が大きな武
器になる。少し英語ができると楽しい。何回も海外旅行をして
掘んだ体験談です。

東条湖グリーンプラザホテルに宿泊の翌日、私の運転で中国

自動車道、神戸淡路鳴門自動車道の明石海峡大橋を経て鳴門海峡に架かる大鳴門橋の車道の下に造られた海上遊歩道から鳴門の渦潮を見下ろした。時間によってはうず潮のない場合があるが、運よく見る事ができた。その後「大塚美術館」へ。

「渦潮」の発生を英語でどのくらい説明できたか分からないが、ロシア人のイリナさんご夫婦に大変喜んでいただいた。

※当時イリナさんはサンクトペテルブルク大学准教授、サンクトペテルブルク・ネバロータリークラブ直前会長であった。

2013.3.10 ひと言の余韻 今日の日経から

後藤正治氏が藤沢周平の作品について「藤沢文学を育んだ謙讓の風土」なる一文を寄せ、その文末を次のように結んでいる。

「普通でいいー」藤沢作品のキーワードであると思う。氏は、下級武士や市井に生きる人々の宿す矜持や信義や哀感の〈微光〉を描いた作家だった。文学的情念を形づくったものは、生来の形質であり、半生の歳月であろうが、その背後に故郷の風土があったことを改めて思うのである。

⇒藤沢周平の時代小説を読んできたわけではないが妙に惹かれる。神さまの采配と、仏さまのご慈悲で、72歳の今日まで「普通にできること」を目指して生きてきた自分を重ね合わせている。

生涯を通じて、不自由であったが不幸ではなく、健康な身体に恵まれ市井の凡人であったが、その「矜持や信義や哀感」を内に秘めて、これでも少しは「世の中」のお役にたったのだろうと、自負と微光を背に感じる。

自分の生きてきた情念は、生来のものというようなものではなく、温かく見守ってくれた父と、子の将来を思い厳しく育て

てくれた母の二人が醸成したものである。

地元の小学校、中学校、高校を経て、関西学院大学で学んだ歳月を土台に、その後再びこの地で働かせていただいた北播磨の風土と周りの皆さまに感謝し、余生を謙虚に生きたい。

藤沢周平が、いつも2階の仕事場の和机で黙々と原稿用紙に向かっていたように、いつまでも事務所の所長机で黙々とパソコンに向かって仕事を続けたい。

2013.4.17 「矢と歌」 H. W. ロングフェローの詩から

The Arrow and the Song — H. W. Longfellow

1. I shot an arrow into the air, 空にはなちしわがそ矢は
It fell to earth, I knew not where: あわれいずこに落ちにけん。
For, so swiftly it flew, the sight ときいきおいにまなこすら、
Could not follow it in its flight. その行く末を見ざりけり。

2. I breathed a song into the air. 空となえしわが歌は、
It fell to earth I knew not where: あわれいずこに落ちにけん。
For who has sight so keen and strong, いかにも目ざとき人とても、
That it can follow the flight of song? 声の行くえの見えんやは。

3. Long, long afterward, in an oak 遠くそののちかしの木に、
I found the arrow, still unbroken; 矢はまだおれでとどまりぬ。
And the song, from beginning to end, 歌のもと末ふたたびも
I found again in the heart of a friend. 友の心にあらわれぬ。

(訳詩は昭和22年文部省の小学校六年 国語教科書から)

原典と格調ある訳詩を全文初めて読んだ。何回読んでもよい詩です。ところで「矢」は…? 「空」は…? 「歌」は…? 「な

ぜ」…英語と訳詩を何回も読むとよく分かる。訳詩が、昭和22年・文部省の小学校六年生の国語の教科書に掲載されていたことに驚いている。

2013.5.15 遍照院で「護摩を焚く」

今日は小野加東ロータリークラブの職業奉仕例会。会員である後藤友栄会員の光明寺山・遍照院で、会員のために「護摩」を焚いていただいた。初めての経験であり、感動した。以下、後藤会員から教わったにわか勉強です。

会員が奉納した護摩木という小さな神聖な木片に願いごとを書き、護摩壇の炉の中で勢いよく燃やし、その中に真言宗の僧侶である後藤会員が、護摩木をはじめ、護摩百味と呼ばれる様々なものを投じる。お手伝いの二人の僧侶の読経と作法により、厳粛な雰囲気の中で行われる。

護摩を焚くときに本尊となるのは不動明王。護摩の火は不動明王さまの深遠な智慧を表わし、護摩木は煩惱を表わす。つまり、不動明王の智慧の火で煩惱（護摩木）を焼き尽くすことが、護摩を焚く目的です。

煩惱がなくなって清浄になった我々の願いは、不動明王が悉く叶えてくださる。護摩の御利益は多方面に及び、護摩を焚くことによって、すべての御利益にあずかることができる。護摩を焚くことにはすばらしいご利益があるのです。

私は、護摩を焚く間、いろいろなことをお願いした。自分の脚力維持、家族の健康、母や子や孫の健勝、事務所の繁栄…願い事の多さに不動明王さまもお困りになっただろう。お不動さん。どうぞ、これからもお守りください。

2013.5.26 今日の日経歌壇から

送るべき母を送れば次はもう送られるだけ心鎮もる

（筑紫野 二宮正博） 選者：岡井 隆

選者評：死者のことは「送る」といい「送られる」立場をあわせて考える。この問題は常にだれにでもあるわけだ。

泣きながら生まれ来たりしこの世ゆゑなになんでもわらひて去らむ

（さいたま 松永浩司） 選者：岡井 隆

選者評：この思いもまた死にかかわるもの。

⇒私の「送るべき母」は、施設で元気にしている。94歳、しっかり「送れば」、「送られるだけ」の心境になり、「心鎮もる」毎日をすごしたい。

人は「泣きながら生まれて、ひとりで死ぬ、一滴の露が大河に合流して海に還るように」（五木寛之、大河の一滴から）

「泣きながら生まれてきたのだから、なにがなんでも笑ひて死なむ」

人はみな、泣きながら生まれてその生を祝福される。長い人生の苦しみや絶望を乗り越え海に還るように、私は「笑って」逝きたい。

最近、大学のゼミの同窓阪井暢一君が私の肖像画を描いてくれた。自著「人生夢浪漫 ある税理士の履歴書」が神戸新聞に紹介されたときに新聞に掲載された写真が素材になっている。



私は大変気に入っている。

肖像画は笑っているのがよい。笑って毎日をすごし、なにがなんでもと気張らずに最期はわらいひて去らむ。

2013.6.2 今日の日経歌壇から

綸言^{りんげん}は汗の如しという言葉知らぬトップのなんと多きことか
(東京 種谷良二) 選者：岡井 隆
選者評：「綸言」(トップの言葉)は汗のように一度出たらもとへ戻らない。このごろ多いトップの人の国際的失言に絡めて嘆く。

⇒最近では、「イスラム世界はケンカばかり」は猪瀬直樹東京都知事の失言や、橋下徹維新の会共同代表の「慰安婦問題に関する」失言には驚かされた。自説に対するおごりなのか、自信なのか。どちらでもない。だから、失言。言葉は選ばなくてはいいけないが、言葉はその人の世界観や人間性だと思う。もう古希を過ぎたのだから、思いやりの伝わる言葉が自然に出るようになりたい。

まほろばを走る電車は二両にて先頭からしか降りられぬしくみ
(神戸 宮谷憲雄) 選者：岡井 隆
選者評：大和を走る二両電車。「先頭からしか云々」も何か比喩的にさえひびく。

⇒まほろばとは、「素晴らしい場所」「住みやすい場所」を意味し、美しい日本の国土とそこに住む人々の心をたたえた古語。「倭^{やまと}は国のまほろば たたなづく 青垣^{やまごも} 山隠れる 倭しうるはし・倭建命^{やまと} 古事記」が有名になり、選者も「まほろばを走る電車」を「大和を走る電車」のルビを振っている。

私が読めばこれは加古川線の風景。「北播磨は国のまほろば」

になる。

2013.6.9 今日の日経歌壇から

初めから謝罪してれば済むものを弁解故にややこしくなる

(東京 山口恒雄) 選者：岡井 隆 選者評：なし
⇒最近、大阪府警の複数警官が虚偽調書を作成した事件、初めから謝罪どころか、公判でも偽証していた(朝日6/9)。「謝罪しておれば済んだ」わけでもなく、「弁解している」様子もなく、「ややこしくなっている」のでもないが不幸な事件である。

国や地方公共団体等に不祥事が絶えないのは残念なことだ。国民は役所を信頼し「役所の無謬性」を期待している。この期待が逆に役所の内部で不祥事を隠す方向に動く。その結果、組織として隠しきれなくなると、関係した職員が処分される。

つまり、役所に「組織として職員を守る仕組みがなく、職員のモラルに依存している」そこで職員のモラルが低下すると、組織も、職員個人も、不祥事に手を染めるリスクを抱える。これが問題なのだ。

そこで求められることは、組織も職員も、不祥事を起こさない仕組みづくりだ。これを私は「自治体の内部統制と(公務執行の)コンプライアンスの強化」だと言っている。

「役所の無謬性」の根拠となっている公務員に課せられた厳しい「法令順守と職務専念義務」の上に、さらに「役所の内部統制」「コンプライアンス」の構築が急務である。

※掲載された歌は、親が子の不始末を諫めているシーンなのか。そう考えるとよくあることだ。叱りすぎた親が反省しているのかも。

2013.6.16 今日の日経歌壇から

冬ごとに切られ続けて紫陽花は今年で25歳になりぬ

(松山 園部 淳) 選者：岡井 隆

選者評：紫陽花の季節だ。「冬ごとに切られ続けて」というきびしい手入れの果てにこの花がある。「25歳」と算える妙。

⇒先日、五峰山、光明寺、遍照院で行われた護摩行に参加した。掃除の行き届いた座敷の隅に、薄紫のきれいな紫陽花が活けてあった。この色が何とも清楚で美しい。寺の紫陽花はなぜ、このように美しいのか、うらやましく思う。どうやら、紫陽花は、前の晩に紫の水に浸けられて化粧をしたらしい。厳しい手入れを経て咲いた紫陽花に、さらにお化粧をしてあげる。この繊細で細やかな準備に、人を迎え入れる寺の心遣いを感じた。

私の自宅には松の木が4本ある。前栽の2本はたぶん100年ものだろう。後の2本は、坂井時忠県知事時代に「全県全土緑化運動」でもらってきた松の幼木が大きくなったもの。

松の手入れは素人ではできない。毎年、植木屋さんに結構高い剪定料を払って、常緑の美と姿の美を保っている。ときどき切りたくなるが、これだけ長く付き合ってくると、高い剪定料を払ってもできる限り手入れを続けてやりたい。

と言っても、日常の庭木や花壇の手入れも、掃除も、散水もみんな家内の仕事。私は毎朝眺めているだけで何もできない。「ご苦労さん」。

2013.7.14 今日の朝日歌壇から

あちこちの富士と名のつく山までも世界遺産にときめいている

(盛岡市 舟山 治) 選者：高野公彦

選者評：富士山が世界遺産に登録され、各地の〇〇富士もと

ときめいているだろう、と想いを拵げた楽しい歌。

⇒日本には各地に「～富士」と名づけられた山は多い。300くらいあるそうだ。蝦夷富士、津軽富士、讃岐富士、薩摩富士…など。

孤高さと美しい裾野が富士山の魅力だが、全国各地の富士山の山容はさまざまであるが、地元の人々の親しみと愛情が込められ「おらが富士」として君臨している。

兵庫県の「おらが富士」は、有馬富士（三田市）、淡路富士（洲本市）、長富士（加西市）、但馬富士（豊岡市）、丹波富士（丹波市）、播磨富士（神河町、多可町）など。加東市の「おらが富士」は、秋津富士、播磨小富士（三草山）の二山。

私は、今から35年前の1978年1月1日、当時の新東播紙に「バランスくずさないで」のタイトルで地域の観光振興について意見を述べている。文末のフレーズを紹介しよう。

「(播磨)中央公園の施設も、闘竜灘の奇岩怪石も、行列をして楽しむものでも、見るものでもない。それは、ゆっくりとくつろいで楽しむ「こころのひろば」である。我が郷土の明日を担う地域の為政者にこの夢と期待を託したい」(人生夢浪漫59ページ)

世界遺産に登録されてからの富士山観光の喧騒を聞くにつけ、おらが郷土の観光資源である、美しい山、川、ダム湖、神社、仏閣を大切に守り、後世に引き継いでいかなければならないと、想いを拵げている。

最近、観光といえば、ゆるキャラ、B級グルメ、イベント、屋台、物産展など「はしゃいで、ときめいて」いるものが多い。世界の、特に、ヨーロッパの一流観光地にこんなものはない。そこは、世界中の人が、ゆっくりとくつろいで楽しむ「こころの

ひろば」になっている。

2013.9.1 今日の日経歌壇から

巖を噛む浪の岬の遊歩道あそこまでゆき吾と向き合はむ

(吹田 鈴木基充) 選者：岡井 隆

選者評：「あそこ」とはどこか。岬の突端だろうか。そこで独りになってはじめて「吾」自らと正面から向きあえるのだ。

⇒北海道の宗谷岬、北陸の珠洲岬、四国の室戸岬、足摺岬、九州の佐多岬などを観光したことを思い出す。岬の遊歩道から歩ける限り突端近くに行き「巖を噛む浪」を見ながらひとりになって「吾」と向き合い「もう少し…できるようにになりたい」。今でも涙がでる。

これでは「吾」に向き合ったことにならない。文才のないことを恥じている。

凱旋の人逃げし人ふるさとにみな集り来て夏花火観る

(横浜 大建雄志郎) 選者：岡井 隆

選者評：故郷に錦を飾った人も「逃げた」だけの人も帰郷して夏花火を見る。作者はどちらの側か。

⇒夏花火の夜に、ふるさとに凱旋などありはしない。みんなただの帰郷だ。ふるさとから逃げし人、みんな集いくるがよい。夏花火は普通の人のものだから。

2013.9.28 地方自治体の監査

地方自治体の監査委員は、自治体の監査を通して、自治体のマネジメント（経営、管理）とガバナンス（統治、監視）のあり方に影響を及ぼしている。

自治体のマネジメントについては、昨年の決算審査講評におい

て、「業務の有効性と効率性（最少経費で最大の効果）」を目的として、首長が組織マネジメントである内部統制を構築することが大切。首長のリーダーシップにより、職員の意識を変革し、地方自治体を取り巻く様々なリスクに対して、自律的に対応可能な体制を整備して不祥事が発生しない強い体制（仕組み）を創らなければならない」と述べた。

今年の決算審査講評では「自治体ガバナンスと監査」について「地方自治体のガバナンスは、①議会制度 ②関連法規 ③職員（公務員）の3つの要素が十分機能することによってその成果を上げることができる。選挙により選ばれた議員が自治体のガバナンス機能を発揮する。優れたガバナンスを可能とする関連法規の完備と徹底遵守。さらに自治体職員による適正な行政執行の3つが機能して初めてよいガバナンスが可能となる」と述べた。

ところで、監査委員や事務局職員による自治体監査によるガバナンスは第29次地方制度調査会報告において指摘された「監査委員の専門性と独立性により、監査委員監査が実質的な外部監査機能を発揮すること」により可能となる。

しかしながら、現実の自治体監査委員監査は、法制度において、その選任方法、議会選出委員、事務局員のあり方などにおいて外見的独立性は必ずしも確保されていない。このような状況の中ではあるが、私は自治体監査委員として、現行法の枠内で出来る限りのガバナンス機能を発揮することを心がけてきた。

以上の経緯を経て、今年の決算審査意見書の文末に私の「自治体マネジメントとガバナンス」に対する思いを込めて次のように書いた。

「今後とも引き続き、自主財源の確保と、施策の『選択と集

中』により、公共施設マネジメントの推進、諸経費の節減、行政の簡素化と効率化に努められたい」。

「最後に、信頼性の高い市の行財政運営を推進するために、業務の有効性と効率性を図ることを目的として内部統制を構築し、さらに自治体ガバナンスを可能とする関連法規の整備運用と徹底遵守により効率的でよい統治を目指されることを期待する」。かくて私の暑い夏は終わった。

※今回で任期の最後となる決算審査意見書に、自治体のマネジメント（経営、管理）とガバナンス（統治、監視）のあり方について所感を書くことができ、本当にうれしい（「ロータリーの友」2013.12月号に掲載された）。

2013.9.30 今日の朝日歌壇から

雲はまだ真夏のかたち空だけが運動会の色に近づく

（富山市 松田梨子） 選者：馬場あき子

選者評：中学生の新鮮な眼が「運動会の色」という言葉を発明。抜けるような空の青さを感じさせる。

⇒9月は運動会シーズン。28日（土）に兵庫教育大学附属小学校の運動会に参加した。附属小学校・開校第1回生1年生（仮校舎：1年生と4年生を募集）」に入学した次女、翌年4年生に滝野東小学校から転入した長女、続いて1年生から入学した三女が3人揃って本校を卒業し、今は孫が3人通学している。家の孫が同じ小学校で揃うのは最初で最後、その運動会に「じいーじい、ばあーばあ」として参加してやるのもこれが最後だ。

昼前に着くと、午前中最後の種目「ミュージカル」（高学年）を行っていた。みんな元気に、のびのびとそれぞれのアクションを行っていた。

私は、「何時も見学席にいたなあ」と感慨無量。徒歩競争など個人競技はないようだったが、全校生を赤、黄、青に区分けして競争していた。2年生の孫が「じーちゃん、赤組が勝ったよ」と得意顔で教えてくれた。

昼食は、みんなそろって持参の小さなテントの下で、おにぎりなど運動会弁当、ああ、何年ぶりだろう。会話が弾む。

その日の夕方、毎年奈良から来てくれる長女の夫の父母ら、祖父母夫婦、子ども夫婦、孫と一緒に、近く中華料理店で夕食会。このなんでもない普通の幸せがいつまで続くのだろう。子どもと孫がいてくれてありがとう。「じーじい、ばあーばあ」冥利に尽きる。

空はもちろん抜けるように青い。ところどころに、一ふわ、二ふわ 白い夏の雲が浮かんでいた。暦の上ではすでに秋だが、まだ夏の雰囲気が残る空、これが「運動会の色」なのか。しかし「運動会の色」という言葉が中学生の発明だとは驚いた。

2013.10.3 今日の日経・春秋から

村田奈津恵さん（40）は線路に横たわる男性（74）を見つけ、車を飛び降りて踏切内にはいり、男性を救って自らは命を落とした。「助けなきゃ」。父が止めるのを振り切った奈津恵さんの、それが最後の言葉だという。

糸井重里さんに「ひとつ やくそく」という詩がある。

おやより さきに しんでは いかん

おやより さきに しんでは いかん

ほかには なんにも いらなけれど

それだけ ひとつ やくそくだ

子を思う親の真情はいくつになっても変わらない。目の前で

娘を失った父の無念もまた、思わざるを得ない。(日経のコラム「春秋」から)。

⇒私の一家は社高校を卒業した。母は昭和11年卒(女学校第22回)、現在94歳になるが元気に暮らしている。その母が90歳を過ぎた頃からお世話になっている介護施設で、社高等女学校の校歌を一つ覚えのように何回も披露するので、今では介護師さんが歌詞を覚えて母の歌唱をリードしている。

母は生涯、社高女卒の気概を持ち続けた。卒業後すぐ、職業軍人であった父と結婚し、戦前、戦後の生きにくい時代に、昭和19年の夏、2歳半でポリオに罹病した私と3人の妹を含め4人の子ども(全員社高校同窓)を育ててくれた。ヨイトマケの母ちゃんとは少し違う意味で「えらいおかん」であった。

90歳過ぎから急に認知症が進み、最近のおかんの言動から、この子を「しっかり育ててやらなくては」と頑張った「子を思う親の真情」は知りようがないが、いまはたぶん「儂わしの葬式を出さずに先に死んではいかんぞ！」と睨みつけているように思う。

「それだけ ひとつ やくそく」 必ず守るから。

2013.10.13 今日の日経歌壇から

並木道ゆく人の背に配られた木もれ日ひかる切符のように

(横浜 橘高なつめ) 選者：岡井隆

選者評：秋ともなれば「木もれ日」の光も夏とは違う。人々は「配られた」この切符を使ってどこへ行くのか。

⇒木もれ日は、林の木立から太陽の日差しが漏れる光景のこと。「木漏れ日、木洩れ日」とも書く。

2011年9月南フランスのエクス・アン・プロバンスへ行き、セザンヌのアトリエを観光した。アトリエはセザンヌの絵を思わ

せる木漏れ日の中にある2階建ての家。

エクス・アン・プロバンスは、ローマ時代のローマの植民都市、古い歴史の街。ここでは、セザンヌ絵画の原風景をエンジョイした。街のプラタナス並木と噴水は、まるで絵画の中にあるようであった。

傍白

昨年まで員外監事を務めていた丹波ひかみ農協の葬祭会館の名前は「こもれび」だった。人生最後のセレモニーであるご葬儀において、木漏れ日のような温かさとやすらぎを皆さまにお届けしたい。そんな想いを込めて、JA会館「こもれび」は平成19年10月15日にオープンしました(JA丹波ひかみHPから)。

春の木もれ日はやさしく柔らかい、夏の木もれ日はきらきりとまぶしい、秋の木もれ日はまるやか、冬の木もれ日はぬくもりがある。そうだ、温かさとやすらぎの木もれ日の下で世俗を離れ、静かに時間の過ぎゆくことを楽しみたい。

2013.11.2 今日の日経歌壇から

いろいろな人に影響受けしのち今夜も星に照らされている

(奈良 山上秋恵) 選者：岡井隆

選者評：いろいろな人に影響を受けたという感慨と「今夜も星」の光に「照らされている」自分。上下句の意外な噛みあい方はなぜだろう。

⇒この歌の作者は誰にどのような影響を受けたのか。どのような人なのか。今夜も星の光に照らされ、何を思っているのか。

ところで、私は誰にどのような影響を受けたのか。第一に、生涯を生き抜く強いからだを与えてくれた両親、第二に、生涯を生き抜く知恵を与えていただいた小中学校の恩師、学力の基

礎を教えていただいた高校の恩師。第三に、生涯の職業の基礎と生き方を教えていただいた関西学院大学商学部・青木倫太郎教授の「ガンバリズム」とそのゼミ仲間、青年会議所では「友情、奉仕、修練」の実践をともにしたその仲間、ロータリークラブでは、自己の職業である事業や専門職業を通して奉仕を行う「職業奉仕」それを貫くのは「職業倫理」と「自利利他」の精神であることを教えてくださったロータリーのよき指導者…。

これらが一体となって、私はすばらしい人生を生きてきた。ともに過ごした仲間や私を取り立ててくださった多くの方々に感謝したい。

2013.11.4 今日の朝日歌壇から

癌病棟なれば見舞いに来るほうが試されている死への距離感
(東京都 石島正勝) 選者：永田和弘

選者評：ぎこちなくなりがちな癌病棟への見舞い。確かにこちらの意識が「試されている」。

⇒2年前に兵庫県立がんセンターに前立腺がんの放射線治療のため入院した。この病院は、都道府県型および地域がん診療連携拠点病院、従って入院したのは癌病棟。私の場合、ここが癌病棟であることに無頓着な見舞い客はなく「見舞いに来るほうが試されている死への距離感」という怖い緊張感はなかった。

見舞いの際の面会は、決められた場所で決められた時間内に短時間で行く。長時間や多人数での面会、小さい子ども連れの面会は遠慮する。場合によっては面会ができないこともある。これ以外のルールはない。がん患者も、多くの場合ほかの病気と何ら変わらぬ普通の病人だ。

「がんと診断された人、治療中の人、さらに治療を終えた人ま

でを含めて「がんサバイバー」と呼ぶ。そのサバイバーが急増し、専門病院はパンク寸前だという。急速な高齢化に伴ってがんにかかる人が増える一方、診断や治療の進歩で、がんが“不治の病”から長く付き合う慢性病に変わってきたためだ。

ここで重要なことは「がんが“不治の病”から長く付き合う慢性病に変わってきた」ことだ(今日の神戸新聞から)。

⇒この国民的理解があれば、病状などによってお見舞いに伺う時期や時間の配慮は必要だが、やさしい気持ち、思いやりの気持ち、温かいことばが第一だ。無財の七施に顔施、眼施などという言葉がある。ぎこちなくなりがちな癌病棟への見舞いならやめておこう。見舞いに行かない配慮も時には必要だ。

2013.11.10 今日の朝日歌壇から

職業は就活生です 新宿のハンバーガー屋で夜行バスを待つ

(瀬戸内市 安良田梨湖) 選者：高野公彦

選者評：就活の辛さ。これから岡山に帰るのだろう。別の葉書に「新幹線にせられえ」なんて言うな母よ 十か月目就活生に)の歌もある。

⇒少子高齢社会の担い手である大学新卒生の就職が厳しい。「職業が就活生」とは辛いが、この状態は15年くらい前から続いている。一人で数十社の就職試験を受け、書類審査で合格しても、その後数回の面接を受け、ようやく「内定通知」がもらえる。

大阪市内で就活をした次女、三女が言っていたが、毎日の就活で、梅田から、淀屋橋、本町、心斎橋まで、靴はすり減ったがビジネス街の地理と商業ビルの名前を覚えたと。

最近、公務員や教員を目指す人の試験も難しく、何回も試

験を受ける「公務員・教員浪人」が増えている。

運よく合格し希望の職種に就ければよいが「もう少し、もう少し」と頑張り、いつの間にか受験制限年齢になるのはさらに辛い。

これは、就職希望者と採用する会社の雇用条件などのミスマッチに第一の原因があるが、経済の問題として捉えると1990年代半ばから雇用と景気との連動性が強まり、特に製造業で雇用減が起きたことが大きい。

最近では、経済のグローバル化による企業の海外進出、IT技術の高度化による人の労働からロボットへの移行などで企業の雇用吸収力が低下し、その上、子育て優遇や定年延長など正社員を解雇できない分、新卒採用を抑制して調整していることにも理由がある。

少子化で若者が減り、団塊の世代が順次退職して大学新卒者は歓迎されるはずなのに、「やさしかったのは大学入試だけ」という笑えない状況になっている。企業の新卒雇用優先や、労働政策としての新卒者の職業紹介・職業教育事業のさらなる充実が求められている。

2013.11.18 今日の朝日歌壇から

〈辛抱ばい〉 やや口曲げてつぶやける高倉健の文化勲章

(鹿嶋市 加津牟根夫) 選者：高野公彦 選者評：なし

⇒高倉健は受章にあたり母親について触れている。「大学卒業後、生きるために出会った職業でしたが、俳優養成所では「他の人の邪魔になるから見学しててください」と言われる落ちこぼれでした。それでも「辛抱ばい」という母からの言葉を胸に、国内外の多くの監督から刺激を受け、それぞれの役の人物

の生きざまを通して社会を知り世界を見ました」(受賞コメントから)。

「人生劇場 飛車角」「日本侠客伝」「網走番外地」「昭和残侠传」など任侠映画に出演、若者の人気を得たが、なぜか「やくざ映画」が多かった。辛抱の時代であったのだろう。

20年くらい前から「八甲田山」「幸福の黄色いハンカチ」「鉄道員(ぼっぼや)」「ホテル」などで存在感を發揮し、昨年8月公開の「あなたへ」は205本目の出演作となった。

「辛抱ばい」という母親の言葉を文化勲章受章のコメントに選んだところがすごい。私には高倉健さんは辛抱の人というより「寡黙の人」の印象が強い。高倉さんの役どころの寡黙で、深み、人間味、実力のある人は怖い。「鉄道員^{ぼっぼや}」の印象がそうだ。

古希を過ぎると、どんな小さな会議に出ても出席者の最年長の部類に入ることが多い。既に実力者でやり手の年齢を過ぎている。会場へは少し早めに行き、指定席でなければ着席位置を考えて座る。発言は控えめ、饒舌は禁物、司会者から指名されてから意見を言うのがよい。相手の意見に賛成できないと思っても、一旦相手の意見を評価して、その後簡単明瞭に短いことばで自分の意見を述べる。説教くさいのは一番いけない。

高倉健さんの辛抱と寡黙はお手本だ。あれだけの「人間の存在感」は容易に身につかない。普段から言葉を選び、相手を見て、適時に話す努力が必要だと改めて思う。凡人の私には難しくても出来そうにもないが心がけたいことだ。

〈沈黙がよい〉後になって気がつく人間の存在感

2013.11.24 今日の日経歌壇から

そっけなく散る落ち葉ありあれこれと趣向こらして散る落ち

葉あり (横浜 三木紀子) 選者：岡井 隆

選者評：「散ることに疑問を持って散ることをやめる異端の落ち葉がない」とも歌っている。落ち葉に様々な思いを託するのが日本人。

⇒秋も深まり本格的な落葉の季節。長女宅の大きな紅葉や自宅の前栽の小さな紅葉の木が見事に色づいている。間もなくひらひら舞いおちる。舞い落ちる様を「そっけなく」と感じるか「趣向凝らして落ちているな」と感じるか、感じ方はいろいろだけれど「散ることに疑問を持って散ることをやめる異端の落ち葉がない」とは繊細な心の持主。私には散りゆく落ち葉はやがて来る厳しい冬に備える越冬準備、寂しさ、侘しさのイメージが強い。

山にはまだ多くの落葉樹の葉が残っている。初雪の音が聞こえ出すとすぐ散ってしまう。今日は、家族そろって鴨川の古刹・播州清水寺の紅葉ライトアップ観賞に行く予定だ。残り少ない紅葉を楽しみたい。

ひらひらと散る紅葉あり 電光に輝く紅葉あり 初雪の音が聞こえる。

2013.12.15 今日の日経歌壇から

ありがたや知人以上の人多く友人未満で居りたく思ふ

(清瀬 波多野千津子) 選者：岡井 隆

選者評：近くにいる人とは幸い「知人以上」のつき合いをしているが、かといって「友人未満」でありたい。微妙な心理。

⇒知人以上の人が多いたが、友人未満で居りたい。選者は「微妙な心理」と言っているが、「友人以上」になってしまうと面倒なことでも起こるのか。それとも「ある一定

の年齢以上になると友人づき合いも面倒だ」という意味か。

ロータリークラブ (Rotary Club) の定款には「ロータリーの目的The Object of Rotaryは、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある。具体的には、次の各項を奨励することにある。

第1 知り合いacquaintanceを広めることによって奉仕の機会とすること。(以下第2～第4省略)と書かれている。クラブの会員同士は「知り合いacquaintance」であって「friend」ではない。もちろん、知人以上の友人であることは望ましいことだが言葉は使い分けている。

私は自著の帯に「私の周りにはいつもよき『理解者』がいた」と書いた。この場合の「よき理解者」は友人を含む知人だ。私は幸せだ。

ありがたや 知人以上の人多く 友人以上の人さらに多く居りたく思う。